様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月 １６ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１３４３０

研究課題名（和文）東アジアにおける蘇軾「和陶詩」の受容と発展に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Reception and Development of Su Shi's poetry rhymed with Tao Yuanming's poetry in East Asia

研究代表者
原田　愛（HARADA, AI）

金沢大学・学校教育系・准教授

研究者番号：５０６３８２９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究によって、蘇軾の生きた北宋中期から南宋、金、元までの蘇軾の「和陶詩」（陶淵明の詩124首に和韻したもの）の詩集編纂の過程と、特に蘇軾生前から蘇轍や蘇門四学士に、そして、以後の文人たちへの「和陶詩」の創作の系統を総括的に明らかにした。
また、蘇軾以前の唐代の陶淵明受容の一端を明らかにし、かつ、日本の文人たちへの影響についても分析した。「和陶詩」の編纂・刊刻が時代や地域を越えて行われたこと、それぞれの受容の様相を歴史的背景を含めて解明できた。その成果となる論文を投稿して多くは掲載を許された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
中国の文学史上において、蘇軾は日本を含め東アジア全体に大きな影響を与えた詩人である。彼の晩年の代表作が、東晋の陶淵明の詩文124篇に和韻した「和陶詩」であり、それを継承したのが、彼の弟蘇轍や彼の門弟である蘇門四学士であり、以後、脈々と受け継がれた。「和陶詩」は、日本にも大きな影響を与え、江戸時代には出版され、僧や儒学者などが「和陶詩」を詠んでいる。しかし、こうした蘇軾「和陶詩」の継承について、系統的に分析した先行研究はあまり見られなかった。そこで、本研究は、蘇軾以前から蘇軾歿後の時代と、更に日本の継承を辿り、蘇軾「和陶詩」の各時代・各地域の受容と発展を考察するものである。

研究成果の概要（英文）：Through this study, we have comprehensively clarified the process of compiling Su Shi's "He Tao Shi(poetry rhymed with Tao Yuanming's poetry)"collections from the middle of the Northern Song to the Southern Song, Jin and Yuan, and in particular the process of passing them on to his younger brothers and disciples from his lifetime, as well as to the literati of later generations.
This study reveals one aspect of Tao Yuanming's reception in the Tang Dynasty and analyzes its influence on Japanese literati. I have been able to examine the fact that the compilation and publication of "He Tao Shi(poetry rhymed with Tao Yuanming's poetry)" collections were carried out across time periods and regions, and I have been able to elucidate the aspects of their reception from the historical background. I submitted the resulting papers, many of which were accepted.

研究分野：中国文学

キーワード：中国文学　蘇軾　和陶詩　蘇轍

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

中国の長い歴史において宋代は文学・哲学・史学の人文学三分野において集大成が為された時代であり、印刷技術の発展・普及に伴い、それらの成果が伝播してゆく形態、範囲、速度に甚大なる変化が生じた時代でもある。蘇軾（号・東坡居士、1037-1101）は、そんな宋代を代表する詩人である。但し、彼は哲宗朝元祐年間（1086-1093）に政権を執った党派（後に元祐党と称される）の有力者で、晩年に政争に敗れたことから、最南端の海南島にまで流謫され、その文学は発禁対象となった。没後も元祐党への報復政策である「元祐党禁」が広く行われたため、彼の詩文は所有すら禁止された。しかし、如何なる苦境においても闊達さを失わなかった蘇軾は、後の文人たちの模範として尊崇を集めたのであった。

特に、配所の蘇軾が、隠逸詩人として名高い陶淵明を尊崇して創作した「和陶詩」は、彼の人生の集大成とも言える作品群であり、後世に多大な影響を及ぼした。そのため、日本の学界においても多くの先達によって優れた研究が行われたが、多くは蘇軾と陶淵明の人生観や詩境における関係性に着目するものであった。近年は、内山精也氏の「蘇軾次韻詩考」（『中国詩文論叢』第七集、中国詩文研究会、1988 年）を先魁として、宋代に盛行した「和韻（脚韻を同じくして原詩に唱和する技法）」に注目し、文学史的に考察されるようにもなったが、蘇軾が弟の蘇轍を始めとする同志に対して和陶詩の継承を促した実態や宋代以降の文人の「和陶詩」創作の受容と発展に対する視点が乏しかった。

申請者はこれまでに蘇軾文集の編纂についての研究および蘇軾「和陶詩」に関する研究を同時に行ってきた（後述の業績欄を参照）。後者については蘇軾の生前から歿後にかけて「和陶詩」の創作・伝承に関わった蘇轍・蘇過等の一族についての考察を行った。前者については平成 26 年度～平成 28 年度にかけて交付を許された若手研究（Ｂ）「東アジアにおける蘇軾文集の成立と伝承に関する研究」（課題番号：26770128）によって、①蘇軾の生前～北宋末の詩文集、②南宋の詩文集、③宋～元における詞集（詞は遊芸から派生した歌辞であり、宋代に流行した）という時系列順に、また、その文学の内容に沿って究明した。その際、蘇軾は「和陶詩」の詩集四巻をその他の詩文集とは別に独立して編纂したため、最終年度にあたる平成 28 年度に④蘇軾の生前から元代における『和陶詩集』について、日本・台湾・韓国にのみ存在する資料などと併せて調査した。

２．研究の目的

本研究は、宋代の代表的文人蘇軾が六朝東晋の隠逸詩人陶淵明の詩文 124 篇に唱和した「和陶詩」の継承過程を系統的に考察することを目的とする。蘇軾の文学、中でも晩年の代表作である「和陶詩」は時代を越えて読み継がれ、そのことを論及するものは存在する。しかし、それは現存の中国におけるテキスト系統を整理した考察や陶淵明と蘇軾の関連性に終始した論説で、彼の弟子や後世の文人が詠んだ「和陶詩」を具体的に究明したものは無く、日本への影響などには注意が払われていなかった。蘇軾「和陶詩」のテキストと後人の「和陶詩」創作という二つの継承過程を、東アジア全体に与えた影響とともに系統的に解明することを目的とした。

そして、申請者は、これまでに蘇軾生前から元代にかけての文集編纂についての研究、また、蘇軾晩年の代表作「和陶詩」に関する研究を同時に行ってきた。そして、後者の「和陶詩」の継承において蘇軾を生涯支えた蘇轍が重要な役割を果たしたことを明らかにしてきた。更にそれらの研究を進め、かつ、前記の問題を解決するために、以下のように、研究を分けて進めようと考えた。

(1)蘇軾前後の陶淵明受容と蘇軾「和陶詩」
(2)南宋以降の文人の和陶詩受容と創作
(3)日本や朝鮮など東アジアにおける和陶詩受容と創作

これによって、現代に至るまで大きな影響を及ぼす蘇軾の「和陶詩」が広く継承された背景を、具体的に把握することができるとした。

３．研究の方法

本研究の目的達成のために、研究を進めるうちに当初の計画とやや進め方を変え、以下のように研究を進めた。

(1)北宋から元明までの『和陶詩集』編纂過程（2017 年度～2018 年度）

2016 年度に弟の蘇轍やいとこの程之才などの協力を得て「和陶詩」の文集編纂に至った過程を辿り、かつ、南宋から元にかけて出版された文集 7 本の流伝について、系統的に網羅した研究を行った。その成果を論文「蘇軾『和陶詩集』編纂考」としてまとめた。また、明代においても、『東坡続集』、そして、『東坡全集』中の『東坡先生詩集』の編纂と出版を調査した。特に伝王十朋注・陳仁錫評閲『東坡先生詩集』は、日本に流入し刊刻された重要な書物であることが判った。

(2)蘇軾以前の陶淵明受容（2017 年度～2019 年度）

蘇軾以前の陶淵明受容について、特に李白・王維・白居易・柳宗元など、主に唐代を中心に調査したが、先行研究も多かった。そのため、主だった内容と傾向、蘇軾への影響を分析しつつ、詩人から詩人への継承を学校現場の教材として活かすべく、李白と王維について論文にまとめた。白居易・柳宗元の受容は、蘇軾や蘇門四学士の「和陶詩」との関連性が大きいので、特に次の(3)に示す蘇門四学士のところでの分析に活用した。

(3)蘇轍および蘇門四学士の和陶詩受容（2018 年度～2019 年度）

蘇轍の和陶詩受容については、拙稿「蘇轍による蘇軾「和陶詩」の継承」（『日本中国学会報』第六十三集、2011 年）において論じていたが、更に蘇軾と蘇轍の帰隠への意識について「烏台詩案」から考察することにした。「烏台詩案」の先行研究については、蘇軾の文学性や筆禍事件としての歴史的意義についての論攷が多い。しかし、このとき、蘇轍も蘇軾に連座して左遷されており、今回、その経緯や蘇轍の思想の変遷に関して詳しく考察することで、「烏台詩案」およびその後の流謫が後年の彼らの「和陶詩」創作の基礎となったことが分かった。

また、蘇軾を師とする文人集団「蘇門」における「和陶詩」継承を考察するために、まず門人筆頭である黄庭堅について分析した。他の晁補之・張耒・秦観について、それぞれの受容と創作についての資料を収集し、分析を行い、学会にて発表した。これらの考察により、「和陶詩」テキストの編纂と流伝、そして、蘇軾・蘇轍の直近の弟子への継承課程を一部明らかにすることができた。

(4)南宋以後および日本や朝鮮など東アジアにおける和陶詩受容と創作（2017 年度～2019 年度）

東アジア全体の「和陶詩」受容についても別に研究を進めたが、朝鮮半島における「和陶詩」については既に先行研究があったため、日本における「和陶詩」について考察することにした。拙稿「蘇軾『和陶詩集』編纂考」で宋代から元代までの大陸における『和陶詩集』の編纂過程を

考察したが、そこから『和陶詩集』の日本への流入および収蔵・翻刻の過程、そして、日本における「和陶詩」創作の両面から資料を収集した。これらの資料については整理が十分にされていないため非常に難航したが、義堂周信の言及を端緒に、江戸時代の室鳩巣や松崎慊堂、藤澤南岳などの「和陶詩」が見つかったことから、現段階の分析結果によって論文をまとめる予定である。

南宋以後の「和陶詩」については、中国の学界で既に幾つか論文があったため、その収集と分析を行い、かかる先行研究から導かれる申請者の論点がないかを考えながら、研究を進めたが、新たに報告すべき事柄がなかった。但し、蘇軾を上回る 164 首もの「和陶詩」を詠んだ郝經（1223-1275）については、2018 年 11 月に『郝經集箋注』が刊行されたため、これを契機に他の作品なども包括的に調査することが可能になった。現在、その分析を進めている。

４．研究成果

本研究を進めた成果は以下のようなものである。

(1)北宋から元・明までの『和陶詩集』編纂過程と黄庭堅の和陶詩受容（2017 年度～2018 年度）

北宋から元までの蘇軾の文集編纂の様相については、「蘇軾『和陶詩集』編纂考」（『日本宋代文学学会報』第 3 集、2017 年 5 月）に掲載された。明代の蘇軾の全集本編纂については、既に先行研究があったので、(4)において、明にて刊刻された『和陶詩集』が日本への流入し、更に日本においても刊刻された経緯を分析、それを発表する方向に移行することにした。

(2)蘇軾以前の陶淵明受容（2017 年度～2019 年度）

李白については「漢詩教材研究―李白「山中問答」を読み解く―」（『金沢大学人間社会研究域学校教育系紀要』第 10 号、2018 年 3 月）、王維については「漢詩教材研究―王維「送別」を読み解く―」（『金沢大学人間社会研究域学校教育系紀要』第 12 号、2020 年 3 月）にまとめ、掲載された。

(3)蘇轍および黄庭堅以外の蘇門四学士の和陶詩受容（2018 年度～2019 年度）

蘇轍との「帰隠」の紐帯を考察する研究については、「蘇轍烏臺詩案考」（東英寿編著『唐宋八大家の世界』、花書院、2019 年 3 月）にまとめた。後に修正を行い、中国語に翻訳して「烏臺詩案前後的蘇轍」として『新宋學』（2020 年 9 月刊行予定、復旦大学出版社）に投稿し、掲載が許された。黄庭堅の和陶詩受容については、「黄庭堅における蘇軾追悼の詩―「帰去来兮辞」の追和に代わるもの」（『中国文学論集』第 46 集、2017 年 12 月）においてまとめた。蘇門四学士については「蘇門四学士と「和陶詩」」という題目で発表した（第 45 回宋代史研究会夏合宿、2019 年 8 月 27 日）。

(4)南宋以後および日本や朝鮮など東アジアにおける和陶詩受容と創作（2017 年度～2019 年度）

この項目のうち、南宋以後の和陶詩においては、先行研究が多数見つかったので、研究が不十分であった日本の受容を分析することにした。現在、分析を終えて論文にまとめているところで、2020 年度に「日本における蘇軾『和陶詩集』の流入・編纂過程について」、また「「和陶詩」を詠んだ日本の詩人について」、この編纂と創作の二つの「和陶詩」の受容を系統的に明らかにして、『日本宋代文学報』および『日本中国学会報』等に投稿予定である。また、近代文人の蘇軾受容を調査する過程で得た資料を基礎に「蘇軾「代張方平諫用兵書」と幸田露伴「蘇東坡と海南島」」（東英寿編著『唐宋八大家の諸相』、花書院、2020 年 3 月）をまとめ直した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 原田愛	４．巻 3
２．論文標題 蘇軾『和陶詩集』編纂考	５．発行年 2017年
３．雑誌名 日本宋代文學學會報	６．最初と最後の頁 81-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 原田愛	４．巻 46
２．論文標題 黄庭堅による蘇軾追悼の詩―「帰去来兮辞」の追和に代わるもの―	５．発行年 2017年
３．雑誌名 中國文學論集	６．最初と最後の頁 19-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 原田愛	４．巻 10
２．論文標題 漢詩教材研究―李白「山中問答」を読み解く―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 金沢大学人間社会研究域学校教育系紀要	６．最初と最後の頁 171-180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 原田愛	４．巻 12
２．論文標題 漢詩教材研究―王維「送別」を読み解く―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 金沢大学人間社会研究域学校教育系紀要	６．最初と最後の頁 78-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 原田愛
2．発表標題 蘇轍と「烏台詩案」
3．学会等名 第207回宋代史談話会
4．発表年 2018年

1．発表者名 原田愛
2．発表標題 黄庭堅と蘇軾「和陶詩」
3．学会等名 第298回中國文藝座談會
4．発表年 2018年

1．発表者名 原田愛
2．発表標題 蘇門四学士と和陶詩
3．学会等名 第45回宋代史研究会
4．発表年 2019年

1．発表者名 原田愛
2．発表標題 烏臺詩案前後的蘇轍
3．学会等名 第十一届中国宋代文学学会
4．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

1．著者名 東英寿	4．発行年 2019年
2．出版社 花書院	5．総ページ数 253
3．書名 唐宋八大家の世界	

1．著者名 東英寿	4．発行年 2020年
2．出版社 花書院	5．総ページ数 284
3．書名 唐宋八大家の諸相	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考